カリフォルニアの風（１２月増刊号）

「校歌」

12 月 16 日、幼小部サンノゼ校の子どもたちが、校歌を、保護者合唱団の皆様、保護者の皆様、教職員と一緒になって合唱する様子を、子どもたちと保護者合唱団に挟まれたところに立って、聴かせていただく機会がありました。

聴くにつれ、校歌が、子どもたち、会場内の皆様それぞれの心をつないでいるように感じられ、一体感というのは、「補習校に通っている」という特別な思いの中に、「ともに学び、ともに生活している」時を、かけがえのないものと想われているからこそ生まれるもの、と思いました。

その合唱は、子どもたち、保護者の皆様、教職員の互いの心を響かせながら進んでいき、途中の「明るい笑顔　はずむ声」の時には、子どもたち一人ひとりの表情がゆるみ、歌声がいっそう大きくなって、「共に学んだ（一年の）思い出を」振り返っているようでした。続く「きらめく瞳」の時には、子どもたち一人ひとりを見つめて、「一年、よくがんばったね」の想いを伝えました。
そして最後の最後、「いつか世界の架け橋に」の時のいっそう明るい歌声は、まるで「希望の光」のようで、会場に集まってくださった人たちの心を明るくするほど響いていました。
合唱が終わり、伴奏が止まった時、私は、校歌合唱を通して、学校がまとまっていく、それは本当に素敵なことで、校歌は、私たちにとっての大切な「たからもの」と思いました。

企画してくださいました教職員の皆様、ご協力いただきました保護者合唱団の皆様、会場に足を運んでくださいました保護者の皆様、本当にありがとうございました。
そして、校歌を「たからもの」と感じて歌ってくれた子どもたちへ、「ありがとうございます」のメッセージを伝え、今年一年の締めくくりとさせていただきます。

全校の幼児、児童生徒の皆さんへ

今年一年、本当によくがんばりましたね。
来年の授業日にも、あなたの元気な姿が見られますように、と願っています。
良いお年をお迎えくださいね。